第０章
はじめに

集合住宅に関する研究は既に多くの蓄積がなされている。特に公営住宅や、公団住宅等に関してはその公的な意味からも非常に優れ研究がなされ、それが実際の計画にも反映されてきた。

しかし一方今日の研究者と、計画者、設計者がそれぞれ独立した主体になってくると、余りにも現実とかけ離れた研究や、研究のための研究に陥っている研究もしばしば散見されるところである。それが一概に悪いことと言えないが、設計的センスのない研究はつまらないと日頃から私は考えている。理想としては、研究者と計画者と設計者が一致していることが望ましいと考えている。

つまり、計画者が考えたことを、設計者が理解し更にそれを形にする。次に研究者は、各々の意図がどの様に、使われる人に評価されているか、調査し、次の計画のときそれをフィードバックすると言うサイクルが１人によってなされることが理想と考えた。

今回たまたま水戸のタウンハウスモデル８２のコンペで最優秀賞を獲得し、好運にして自分の応募案が実際に実施されることとなり、この様な研究が可能になったわけである。

この様なのことを言うと、公営住宅の計画や、設計に携わって来た方からお叱りを頂くかもしれないが、ともかく公営住宅の建物は面白くないという印象を、常日頃から持っていた。しかし自分で実施設計に携わってみると、それがどうしてそうなるか良く分かったというのが正直な感想である。そして有名な建築家であっても、公営

住宅の質をほんの少しの前進させることがどんなに大変なことなのか分かった。

今回の研究方法は、公営住宅の研究で多く行われてきたものと余り変わらない。ただその設計意図が生活者にどの様に使われ評価されているのか、実際に設計に関わった者として注目した点が、特徴と言えよう。しかし今回対象とした水戸の桜丘団地は建設されてまだ日が浅く、簡単に評価できない面もあり、また居住者のライフサイクルなども考慮しなければ、より深い検討が出来ない点も忘れるわけに行かない。従って今回は、第一回目の報告という性格である点をご承知置き下さい。

今回の調査研究は、財団法人第一住宅建設協会の支援を頂いて行ったもので、この場を借りて感謝を表したい。